



官能部 部誌



その 2

はじめに

「官能部 部誌その2」が完成しました！

アンケートにご協力くださったみなさま、原稿を寄せてくださった方々に心からお礼を申し上げます。

官能＝性欲。秘めかくされるべきもの。

そうとらえられがちですが、本当にそうなのでしょうか。

美しいものを美しいと感じる心。

素直に対象を賛美する心。

この世のすべてと呼応する心身のどよめき。

これこそが「官能」なのではないでしょうか。

もっとオープンに語られてもよいのではないかと思うのです。

肉欲を取り払っても、そのあとになお残るもの。

業として、生き様としての「官能」。

たのしく、あっけらかんと。

これからも「官能」について語り合っていけたらいいなと思います。

たかさわりえ

ひとつになれない幸福

自分の境界があいまいになる一瞬がある。

目に映っているのはゆっくりと蠢くつむじ。

耳に聞こえているのは互いの息遣いと寝床のきしみ、指が触れているのは熱を持った肩。口腔内はからからで、鼻をくすぐるのは同じシャンプーの香り……で、あるはずだ。

でも本当にそうなんだろうか？

私が見て、聞いて、触れて、味わって、感じているのは確かにあなたなのに。

あなたという形をした熱の塊に溶かされて、五感は研ぎ澄まされていく。

混ざり合って、すべてが融解して、残るのはゆるく揺蕩うひとつの感覚のみ。

おかしいことだ。鋭くなりすぎたはずが、これほどに鈍い。もしかしてすべての感覚は、かつてひとつだけだったのかもしれない。

かつて、母なる細胞が感じた悦び。与えられた熱に打ち震えた、遺伝子のざわめき。それらはいつの間にか分化して、五感と名前がつけられたけれど。

ねえ、目が見るものだなんて、誰が決めた？

耳が聞くものだなんて、誰が決めた？

あなたを見て、聞いて、感じているのは私のすべて。

あなたが触れているのは私のすべて。

貫く痛みに声を漏らす私に、あなたはつらそうな顔をする。やさしいひと、私は大丈夫なのに。

つらいのは、ひとつになれないことだけだ。

私の感覚はひとつになっても、あなたと私はひとつになれない。混ざり合っても溶け合うことはできない。いつかまた分離する。

どれほど同じ熱を分け合っても、痛みを自分のことのように感じて、私とあなたは別の生き物なのだと思います。

それが、かなしい。

だから人は求めあって、手を伸ばして、言葉で繋ぎ止めようとして。ぴったりと肌を合わせることを望んで。

その感情に、名前をつけた。

すべてがひとつだったなら、同じひとつの細胞のままで分裂と融合を繰り返していたならば、きっとこんな思いは生まれなかった。

ああ、と息をつくあなた不思議そうな顔をする。

なんでもない、と笑って首をゆるゆると振ると、くしゃりと顔をゆがめて唇を寄せてくれた。

いい？ とくぐもった声が聞こえたから、小さく頷き返した。

限界まで膨れ上がり、密度を増した私の感覚が弾けるのは、きっともう間もなくのこと。

次に五感をもどってきたら。倦怠感に包まれる身体をものともせず、思い切り抱きしめよう

。

少しだけ癖のあるあなたの髪を撫でて、同じ香りに包まれながら、至近距離で目と目を合わせて囁き合おう。

ひとつになれない、幸福な生き物たちの話を。

笹の葉のそよぐこの寒い霜夜に～万葉歌紹介 小名

笹の葉のそよぐこの寒い霜夜に（万葉歌紹介）

小名

最近大変なんです。千三百年も昔に詠まれたたくさんの和歌が、私の胸を強く揺さぶるのです。その和歌が収録されている歌集は万葉集といいます。万葉集は、なんて面白いんだ！という気持ちを官能部部誌に寄稿させていただくことで少しでも昇華したいと思います。官能部の部誌なので、官能的な歌に偏って書こうと思います。

まずはこの歌。

若草の にい新た手まくら枕を ま枕きそめて

夜をやへだ隔てむ にく憎くあらなくに

（巻十一一二五四二）

訳：若々しいこの新妻とはじめて床をいっしょにしてみて、どうして一夜でも間をおくことができようか、こんなに好きでたまらないのに。（永井路子）

新妻が愛しくて愛しくてたま堪らない夫の歌です。実はこの時代、夫婦といっても常に一緒に住んでいるわけではありません。この時代の婚姻関係は、基本的には男性が女性の下へ通う「通い婚」という形が一般的です。妻は妻の家族（両親やきょうだいなど）と同居しています。男性はその家族にばれないように通わなければなりません。だから毎晚会うなんて当然出来るはずありません。毎晚会ってたらすぐばれてしまいます。会いたくても自由に会えない、という状況が、彼らの恋に与えた影響は計り知れません。今腕に抱いていても、それは本当に今だけかもしれないのです。

しかし、これでもまだ状況はましなほうです。次の歌はもっと切羽詰った状況で詠まれています。

あす明日よりは 恋ひつつあらむ

こよひ今夜だに 早くよひ初夜より 紐解けわざも我妹

（巻十二一三一一九）

訳：さあ、明日からは遠く隔たって、おまえを恋しく思いながら過ごすことになるんだ。せめて今夜は、早くよい宵のうちから、着物の紐を解いていっしょに寝ておくれ、わが妻よ。（永井路子）

旅立ちを目前に、今宵限りのとも共ね寝をせ急ぐ夫の歌です。かなり直球の欲情を歌って妻をかき口説いています。「紐解け」というのはかなり強い語調で、ほとんど命令しています。夫のあせ焦りが伝わってきます。これに対して妻はどう答えたかというところ「今晚一晩という時になって、今さら早く寝たって仕方ないでしょう、あなた。それより、明日から来る夜来る夜の一夜もかかさずに私の夢にお見えになってくださいよ（※伊藤博）」夫の焦りに対して、妻は覚悟を決めている感じですね。「私の夢にお見えになってくださいよ」というのは、この時代その人が強く想うと、想った相手の夢に現れるというジンクスがあったからです。つまり妻は夫に「今だけ愛し合うんじゃないくて、旅の間も毎晩私のことを想ってなさいよ」と言っているわけですね。即物

的で直情的な夫に対して、どっしり構えている妻というのが、好対照で素敵な夫婦です。

なお、夫側の事情を少しフォローさせていただきますと、この旅がどのような理由だったのかは分かりませんが、この時代の旅は大変な困難がともないます。出かける場所にもよりますが、場合によっては命がけだったりもします。夫の切羽詰った思いにも同情を禁じえません。

一方、そんな事情など関係なく、読むと思わずクスリと笑ってしまうような微笑ましい歌もあります。

き伎へ倍ひと人の まだら斑ぶすま衾に わた綿さはだ
入りなましもの いも妹がを小どこ床に

（巻十四一三三五四）

訳：き伎え倍人の斑模様のふ蒲とん団に真綿がたっぷり入っている。俺もたっぷり入りたい、あの子のどこ床に。（※伊藤はく博）

ダジャレか...！（ツッコミ）でも気持ちがすごく分かりやすいと思いませんか。私は、これをもらった女性が「もう」とか言いつつ笑っているところまで目に浮かびました。因みに「伎倍」というのは地名です。現在の静岡県のどこかの村のようです。「伎倍人」というのは「伎倍」に住んでいる人のことです。当時この地域では伎倍の綿は有名だったのでしょう。よい綿がたっぷり入った伎倍の蒲団は、この歌を詠んだ男性にとってもそれを送られた女性にとってもとても身近で、二人には十分に実感をともなって感じられた歌だったでしょう。

もう一つ、身近なものを題材にした歌をご紹介します。

かみ上つけ毛の野 あそ安蘇のま真そ麻むら群 かきむだ抱き
ぬ寝れどあ飽かぬを あ何どこあ吾がせむ

（巻十四一三四〇四）

訳：上野の安蘇の群れ立つ麻、その麻の群れを抱きかかえて引き抜くように、しっかりと抱いて寝るけれど、それでも満ち足りない。ああ、俺はどうしたらいいのか。（伊藤博）

「上つ毛野」は現在の群馬県です。古代において関東地方は布の一大産地です。つまり、布の元になる麻を刈る仕事は、彼らにとっては日常的にこなしている身近な仕事だったんです。だから、この歌を詠った男性は、「麻を抱く」感触は非常にリアルな実感を持っていたはずです。この歌は一般には労働歌（仕事歌）といわれています。辛い麻刈りの仕事をこの歌を謡ってみんなでぎやかに、大らかにやり遂げていたのでしょうね。

男性が刈ってきた麻を、今度は女性が糸にします。

あさ麻を苧らを をけ麻笥にふすさ多に う績まずとも
明日き着せさめや いざせを小どこ床に

（巻十四一三四八四）

訳：麻やを苧（からむし紵）をおけ麻笥（容器）いっぱい糸にしても、明日着物としては着られないでしょう。（だからもう仕事はやめて）さあしようよ、いつものどこ床で。（森浩一※最後だけ伊藤博）

働き者の妻の背中に、夫が恨めしげな視線を投げかけています。家族のために、寝る時間になってもまだ仕事をしている妻。夫もそれは十分分かっているはずです。だからきっとこの歌を詠う

まで、暫く我慢していたでしょう。でも結局我慢しきれなくなって、もっともらしい理由をつけて妻を誘うのです。万葉時代のとある夫婦の日常風景が見えてくるようです。

さて、男性の詠んだ歌ばかりご紹介してきましたが、次は女性が詠んだ歌です。

昼解けば 解けなへ紐の

我が背なに 相寄るとかも 夜解けやすけ

(巻十四一三四八三)

訳：昼間に解こうとしても解けない紐、その紐があなたに寄り添えるしる兆しとでもいうのか、夜になるとたやすく解けてきます。(※伊藤博)

紐が勝手に解けるのは、想う人に会える前兆で、これも一種のジンクスのようなものでしょう。これは当然歌を貰った男性も知っているはず。この時代は男性が女性の下へ通うので、女性は男性を通わせるために想う相手にいろんな駆け引きをしています。これはかなり直接的な誘いですね。夜に紐が解けやすくなっているって、これほど官能的なフレーズがあるでしょうか。

ぜひ、解けやすくなってる紐を、解き放ってしまいましょう！

こま高麗にしき錦 ひも紐と解きさ放けて ぬ寝るがへ上に

あ何どせ為るとかも あやにかな愛しき

(巻十四・三四六五)

訳：高麗錦の紐、この紐を解き放って寝るその上に、どうしろっていいのか、むしゅうにかわいくてたまらぬ。(伊藤博)

前の歌の続きではないのですが、この歌も大変直接的な官能を歌い上げているのでご紹介させていただきます。高麗錦というのはこの時代大変高価な織物です。そんな着物を着ているということは、何か特別な祭の当日だったのか、それとも男性のために女性が精一杯おしゃれをしているのか。どちらにしても、そんな特別な着物の紐をあられもなく解き放って二人で寝ているというシチュエーションが、一種の背徳感をこれ以上ないほど高めています。

いっしょに寝ても、まだ足りない。本当に、これ以上どうすればいいのか。

こ児も毛ち知山 わか若かへるで楓の もみつまで

寝もとわ吾はも思ふ な汝はあ何ども思ふ

(巻十四一三四九四)

訳：こ児も毛ち知山、この山のかえで楓の若葉が紅葉に色づくまで、ずっと寝たいと俺は思う。きみは、どう思う。(※伊藤博)

寝ぼすけの歌ではありません。「寝」とは当然、恋人との共寝を意味しています。ほんのひと時の逢瀬では満足できなくなったのです。こ児も毛ち知山は群馬県渋川市の北方の山だそうです。愛しい人を腕に抱いて、ふと見上げたらこ児も毛ち知山のまだ若い緑が目映った。ああ、まだ離れたくないなあ、例えばあのまだ若い楓が紅葉するくらいまでこのままいてもいいな、なんて。ねえ、きみはどう思う？なんて場面でしょうか。

楓が紅葉する季節になったら、すぐに肌寒い冬が訪れます。

ささ小竹が葉の さやくしも霜よ夜に

なな七重重かる 衣にま益せる 子ろがはだ膚はも

（巻二十一四四三一）

訳：笹の葉のそよぐこの寒い霜夜に、七重も重ねて着るころも衣、その衣にもまさるあの子の肌は、ああ。（伊藤博）

すごいわけです。この歌を詠んだ男性は、妻に会いたくて会いたくて、その肌に触れたくて触れたくてしかたないのです。

これはさきもり防人歌と呼ばれる歌群に含まれる歌です。防人とは、当時東国から兵士として遠く九州まで連れて行かれた人々のことです。任期は三年。行き帰りの苛酷な旅、いざ外国から攻められたら最前線で戦わなければならない重責、親しい人びとや土地から引き離される孤独。そんな極限状態の中で、この歌は詠まれています。

彼を襲う癒しがたい寒さは、衣だけで足りるはずがないのです。

いかがでしたでしょうか。この他にも万葉集にはたくさんの歌が収録されています（四千五百首以上）。今回あまり有名なものは選びませんでした。その代わり私たちに身近な庶民が詠んだ歌をご紹介します。少しでも面白いと思っていただけたら嬉しいです。

なお、（※）印のものは、引用元の訳を重視しながら、若干アレンジを加えています。その旨ご了承ください。

引用図書一覧：「万葉恋歌」永井路子（角川文庫）／「新版万葉集三・四現代語訳付き」伊藤はく博（角川ソフィア文庫）／「万葉集に歴史を読む」森浩一（ちくま学芸文庫）／「萬葉集釋注六・七」伊藤博（集英社文庫ヘリテージシリーズ）

過ぎ去りし 猛き季節を偲ぶ夜の 君と絡める指先凍え

渡部 ひのり

なよたけの鬼手姫

たかさわ りえ

欠けのない月が、大きくせまり落ちてきそうな晩だった。
ぶたれて、はいつくばった池のふち。
輝く月が水面にうつっている。
名を呼んだのだった。
けれど父も母も、もう応えてはくれない。
一瞬のできごとだった。
おそろしさよりも、激しい怒りがこみあげて、紫乃をゆるがした。なぜ、誰がこんなむごいことをさせたのだろう。悔しくて、悲しくて、涙がこぼれた。
「どうする、女が死んじまった」
「まて、娘がいる。死人を連れていくよりはましだろう」
言い合う男たちは、いっせいに紫乃を見下ろした。腕を乱暴につかみあげられる。
まぶしい松明がいくつも突き出された。火が頬をあぶるようだ。
殺されるのか、それとも、さらわれるのか。
引っ立てられながら、紫乃は呆然と空を見上げた。
月はただあかく、紫乃を見下ろしている。
(いやだ。……いやだ！)
いましめる腕に思い切り噛みつくのと、すぐに平手が飛んできて、頬に鋭い痛みが走った。目がくらむ。頭上の月が、血色に染まっていくようだ。
(くやしい。にくい。くやしい)
おもしろい。
つめたい笑い声が聞こえたような気がした。
ふいに闇のふちからあらわれた血塗られた手は、手のひらも節々もぶさいくな芋のようにごろついていて、しかし長い爪をもつ指先だけは、へんにすんなりと美しい。
妖しい手。それが、紫乃を招いた。
はかなく蹴散らされ、踏みにじられる弱者の持ち物ではない。あの手があれば、不埒なものどもを叩き潰し、くらい水底に永遠に沈めてやることも簡単だろう。
この者らを生かすも殺すも思いのままだ
やけつくような憧れを感じた。
震える指先を伸ばし、紫乃は鬼手を握りしめた。一つになる。溶けいっていく感触をもっとし
っかり受け止めようと、息を深く吐き出した。

右手の五指をこきこきと鳴らすと、およそ自分のものとは思われない、巖もくだけそうな丸太のごとき太い腕がある。剛毛のびっしりと生えたひじのあたり。手首や手の平には赤黒い血の筋が縦横に浮き出ている。長い爪は猛禽のそれになている。

取り落とされた松明が燃えているのを、紫乃は裸足で踏みしめた。

逃げまどう男たちの背が、闇に浮かび上がって見える。おかしかった。狩られるのは紫乃のほうだったのに。

鼻を動かす。血のにおいがここには満ちている。いまさっき流された血、そして、これから流されるだろう血と。

満月をちらりと見上げた紫乃は、笑い声をあげた。もう怖くない。

血色ににじんだ涙がひとしずく、ゆがんだ紫乃の唇へとすべり落ちた。

※

ちかごろ、都には鬼がでる。

鬼は卑しからぬ女人の姿をしているという。

秋の衣をまとった姿は楚々として、耳ばさみにした髪が白い頬にかかり、伏した目元が桜色にほんのりと染まったさまは、たいそう美しいらしい。どこぞの姫君かと思ってみれば、右の肘から指先まで、鬼の手をしているという妖しさ。出会った者は、おそれずにはいられないのだと。

鬼手姫、人々はいつしかそう呼ぶようになった。

かの姫は、月のあかく輝く夜にやってくる。そして、たったひとつ、あることをたずねるという。

「月を欲したことがあるか」と。

物語にもきいたことのない話だ。

官位に氏姓、なんの脈絡もつながりもなく、鬼手姫はあちこちの屋敷に現れてはそう訊ねて、かと思うといつのまにか消えてしまうのだ。

怪しいことと帝もお悩みになり、右少将である藤原康行に毎夜のように御所の宿直に任じた。こうして家へ戻るのは久しぶりなのだ。

車が、とまった。康行は物思いをやめ、顔を上げた。

長者邸は立ち働く人々の姿が目立った。近いうちに月見の宴があるのだ。ごく内輪の歌詠み会のようなもので、満月の晩に開かれる。

一年前から、父は月見の宴を欠かしたことがない。案内されたのは池の中ほどにある、すすきを生い茂らせた中島だった。

刈ることもせず、ただ手もつけずのこしてあるので、まるで野原を眺めているかのような趣きがある。

広い庭を駆け回った幼い頃の思い出は、宝にひとしい。

隠れ鬼をしてよく遊んだものだ。三つ年下のはところは隠れるのがへたくそで、枝に髪の毛をひっかけてままだったり、衣のそでをやぶからはみ出させたりしていた。康行がみつけると顔を真っ赤にして怒るから、わざと別の場所で名を呼ばわったりした。

(紫乃)

走るとき背中ではねる黒髪や、こめかみあたりに結んだ朱の飾り布など、今でも鮮やかに思い出せる。すねるときのふくれっ面もなつかしい。

「よく来た」

不機嫌そうな低い声が聞こえた。父の治長が、ゆっくりと池の縁を回って歩いてくるところだった。

狩衣のくたりとしたのを、あっさりと着流している。寸分のすきもない殿上の装いからすると、考えられないことだ。

「出仕をお控えになったと」

中島にかかる橋のたもとに身を持たせかけ、父はため息を吐き出した。

「そのような顔はよせ。たいしたことはない」

気詰まりな沈黙のあと、康行は言い出した。

「本当なのですか、鬼が出たというのは」

ためいきが答えだ。らちもないことだと切り捨てる様子はない。

「あの晩は、ちょうどここで月を眺めていた。すると、突然あらわれた。水面に浮かぶように、静かに。輝姫にうり二つの、若い娘だ」

父の北の方には妹がおり、名を輝姫といった。夫とともに任国に下っていたが、一年前に都に戻る途中、家人ともども殺された。

「輝姫にそっくりの、鬼ですって」

ぼんやりと視線をさまよわせていた父は、うめくように言った。

「そうだ。あれは、紫乃だと名乗った」「まさか」

康行は頬がひきつるのを感じた。

どこを捜しても、輝姫の娘の紫乃だけが見つからなかった。父は人をかり出し、あちこちを探し歩いた。不気味な峠の野山を、康行もともに歩いたが、いとこの姿はどこにも見あたらなかったのだ。

(紫乃……)

父は庭を眺めていたが、ふと言い出した。

「そして、あどけない声で聞いたのだ。月を欲したことがあるかと」

「鬼手姫」

落ちくぼんだ目をした父は、長いため息を吐き出した。

鬼が、身内の忘れ形見を名乗ったなど。信じられるはずがない。

「何と答えたのですか」「ある、と言った」

鬼はただ笑みを消し、雲がほんの少し月をかげらせた間に、姿を隠してしまったのだという。

(鬼手姫が、紫乃を名乗るなど)

胸が痛むのは、頼る者もなく、野山をひとりきりでさすらう紫乃の姿が、頭に浮かんで離れないからだ。

あの子の姿に似ているというのなら、鬼に会ってみたい。

そう言い掛けて、康行は不吉なことだと、すんでのところで口をつぐんだ。

※

「雨か」

夕暮れの空が赤く燃えるようだ。きゅうに降り出した雨はどこか遠くから響く楽の音に似て、心のうちにくすぶる思いをかきたてる。

「待っていてね、康行」

出立の日。花を手渡そうとすると、紫乃は泣いていた。目元をはらして、顔をくしゃくしゃにして。せかされるように手を取り、康行は言ったのだ。

「待っているから、約束だよ」

別れたとき、ふたりはちょうど十一歳だった。紫乃が生きていれば、康行と同じように十六になっているはずだ。年月がたち、康行は官位を得たが、あの日の約束を忘れたことはなかった。

周りから妻を持てとせつつかれてもどうも及び腰になってしまうのは、そのせいなのかもしれない。

たとえどんな姿になっていようとも、もう一度会いたい。できることなら。……たとえ、鬼でも。

「紫乃」「そんなに会いたかったの？」

からかうような声がした。目を閉じ脇息に身を預けたまま、康行はほほえんだ。浅い夢に、あの人が出てきてくれた。こんなことは初めてだ。

「康行、ねえったら」

目を開けたら、きっと消えてしまう。笑い声が耳をかすめた。

「消えやしないよ。まぼろしではないもの」

夢にしてはおかしい。衣擦れの音がささやかにして、ふいに頬を摘まれた。ぎゅうとつねられて、思わず目を開ける。紫乃が好んできていた秋の色。実った柿の色だ。耳の脇を朱の布で結んで垂らしているのもなつかしい。

「寝たふりなんてあんまりじゃないか」

「ほんとうに」

ふれあった手はじっとりと熱かった。

「ほんとうに、紫乃か？」「そうだよ」

康行はただ呆然と見つめ返すことしかできなかった。

なぜここに。なぜ、今。

「ただいま」

かすかに笑って、小首をかしげる。あどけない仕草とは裏腹に、まなざしは愁いを宿しているようだった。童女の髪型をしているが、見た目はすっかり年頃の娘だ。笑っているのに、たださみしそうだ。

「無事だったのか。そう思っているのか」

虚空に問いかけているのではなく、話したい人が目の前にいるのが嬉しかった。

「無事だよ、この通り。みんな悲鳴をあげたけどね」

紫乃はいぶかるように鼻を鳴らした。彼女が鬼だということが、ありえるのだろうか。

「鬼手姫とは、おまえのことなのか？」

いや、まず先に、これがむなしい夢ではないと、どうしたら確められるだろう。

「たぶんね。都に来てから、ほかの鬼とは会わないもん」

この物言いは、たしかに紫乃だ。康行は吹き出した。

目を逸らさずにいると、紫乃はぎこちなく顔を背けた。心なしか、顔があかい。

「もういっぺん、つねってくれないか？」

紫乃はさっきよりずいぶん優しく、康行の頬をつねった。

「あとがつくよ、よそう。おまえの顔、わたしは好きなんだ」

じっと満足げにみつめられて、今度はこちらがまごつく番だった。ただ息をするのもむずかしい。胸がつねられたように苦しい。

康行は咳払いをした。

「……どこで、どうしていた？」

「山奥の小さな寺にいた。お坊さまは、正体をなくしたわたしをしばらく世話してくれたんだ。鬼をなだめすかして追い出そうとするから、逃げ出してきたんだ。お札を貼られそうになったときは、ひやっとしたな」

紫乃は眠そうにあくびをして、ごろりと横になった。

「探さなきゃならなかった、月を奪った欲深い奴を」

広がる髪と、あらわになったしろい喉元。康行は目をそらした。

「賊のことか？」

「ちがう。賊のふりをした、不埒な奴だ」

紫乃は急に起き上がり、間近で康行をにらんだ。

「どういうことなんだ」

「しい」 紫乃はふと耳をそばだて、張りつめた声で言った。

「ゆっくり語らう間もないね」

ばたん、と妻戸が開き、戸口からすさまじい風が吹き込んできた。

「紫乃？」 突然、背筋が凍るような悲鳴が闇をゆさぶった。

いや、獣の断末魔か。腰を浮かせた康行は、喉をならした。あんな鳴き声をついぞ聞いたことがない。

「大丈夫」

紫乃はささやいた。月明かりをうけて、立ち姿はくっきりと浮かび上がり、康行は目を細めて彼女をただみつめた。

「すぐ、すむ」

衣擦れの音がして、紫乃は上衣を脱ぎ落とした。それから身軽く走り出した。妻戸が乱暴に開け放たれる。追いかけた康行は、言葉を失った。

天空の月に届きそうなほど大きな何かが、赤い目を光らせてこちらを睨みおろしている。

白い単衣のそでとともに紫乃は纖手をふりあげた。いつのまにか、赤黒く光る刀を握りしめて

いる。朱の袴をはためかせ、彼女は欄干を蹴ると飛び上がり、影めがけて斬りかかった。

「紫乃！」

康行は室に戻り、脇息につまづきながら、すでに火の消えた灯台をつかんだ。簀の子に出て、高欄を踏みしめて庭に飛び降りた。思いのほか高く顔から着地するはめになったが、すぐに立ち上がってかけだした。

釣り殿のあたりで、朱の裳をひるがえした紫乃が文句を言った。

「もう、何で来るんだよ。大丈夫だと言ったのに」

「助太刀して悪いのか。どうみたって、あれはよくないものだろう。それにでかいし、おまえじゃ勝ち目はない」

「助太刀？」 あっけにとられたように、紫乃は聞き返した。

「灯台で何をしとめるつもりなの」

言葉に詰まった康行は、洞穴を風が吹きすぎる時のような怖気立つ音を耳にした。

はよう、はよう。腹がへって死にそうじゃ

そなたを食らえばいくらかましか

食らおうぞ、食らおうぞ

赤い一つ目だけが、こうこうと輝いている。

「去れ。じきにおまえの腹、はちきれんばかりに満たしてやる」

紫乃は叫んだ。奇妙な笑い声はしだいに遠ざかり、しぼむように消えてしまった。紫乃はつぶやいた。

「あれは、わたしだ。鬼手を望んだときから、そうなった」

差し上げられた右手を見て、康行は目を見開いた。

紫乃は息を細く吐き出して、太刀についた滴をはらった。よく見ると太刀はなく、月明かりに真っ赤な火をはらんだ銅の色をした、むくつけき腕が照らし出されていた。紫乃は唇をかみしめ、乱れた髪の間から康行をにらんでいた。

「わたしは、じきに鬼になる。喰われてしまうんだよ」

手をのべて、紫乃は黒々とうごめく何かをつかみあげた。猫の子ほどのかたまりが、うずうずとのたうっている。さっきのアレが落としていったものだ。

かるく力をこめると、たちまちつぶれて煙となって消えてしまった。開いた手のひらに残るものは何もない。

「わたしの鬼手も、こうしたものだよ。もともと、肉も骨もない。人の欲を糧として、いいように操り喰おうとする」

紫乃はきつく目を閉じた。

康行は紫乃の両肩をつかむと、一息に言った。

「どうして、もっとはやくここへ来なかった」

紫乃は目を見張った。

紫乃はうなずいた。

「必ず方法はあるはずだ。鬼とおまえを切り離してやる。追い出してやるから。もうじっとして

いろ」

あきれたように紫乃は目を細めた。

「どうしておそれないの？」

問いかけに、康行はひかれるように言い出した。

「おれを思い出してくれたんだろう。話してみろ、どんなことでも」

康行は灯台を捨て、紫乃の手をきつく握った。鬼の手だろうと、なんだろうとかまわなかった。腕をひいて、きつく抱きしめた。紫乃はあらがったが、逃がすつもりはなかった。

「紫乃は紫乃だ」

おずおずと、背に腕が回った。と思うと、すさまじい力で締め上げられて、康行はびっくりして顔を離して見下ろした。紫乃は涙で光る目をして、ささやいた。

「わたしは、おまえにそう言ってもらう価値などないんだ」

抱きついてくる紫乃の腕はいよいよ強くなり、息を吸うのもままならないほどになった。

「この手じゃ、おまえに恨まれるようなことしか、もうできやしないんだから」

※

目覚めたとき、妻戸はぴたりと閉ざされ、灯台の火はかすかに揺らめいていた。

しずかな室を見回し、康行は首をひねった。

夢ではないかと疑ったとき、文が枕元においてあるのをみつけた。紫乃の蹟だ。

あかい月が、ただ冴え冴えとしてあかい夜

あなたに引き留めてほしい

わたしが月の住人になるまえに

「なよたけのかぐや姫？」

幼い頃に読んだ物語の一節だ。

なよたけから生まれた姫は、長じるにつれ都でも評判の美しい女人となった。帝は心を姫に捧げたが、天上にある月の宮に帰らねばならない姫は、本心をこの歌にたくし、誰にもあかすことなく地上を去った。

紫乃はなぜこの歌を書き残していったのだろう。

「輝姫……」

そういえば紫乃の母は、なよたけ姫とも呼ばれていた。たぐいまれな美貌を持つという噂と、竹林の庭が美しい竹山第という邸宅にすむために、なかば夢おとぎの世界の住人のように思われていたのだ。

また、蹟が大変美しいと評判だった。康行はこっそりと見せてもらったことがある。やさしく、しなやかな蹟だった。手習いに使いたいとせがんで借りたまま、返さずにいたのだった。

料紙箱のいちばん下に隠しておいたのを、父にみつかったのは隠し場所を誤ったせいにほかならない。「蹟の上手は七難を隠す」が口ぐせの父は、子どもたちの手習いを見るのを楽しみにしていたのだ。

父は、じっと輝姫の蹟を見つめていた。そして、懐にしまったのだ。見てはならぬものを目の当たりにしたような気がした。

輝姫は、父の義理の妹だ。輝姫に懸想した父が、まさかあのような惨いまねをしたと、紫乃はそう信じているのだろうか。復讐するために、紫乃は鬼手を宿して生きてきたというのか。

紫乃が残した文は、もう一つあった。しわだらけになった、薄青い料紙を広げた康行は、息をのんだ。

なぜこれほどあなたは遠いのですか

あなたが天にあらねばならぬなら

わたしは鬼になってでも、月の都を手に入れましょう

それは見まがうはずもない、父治長の蹟だった。

※

ところどころに焚かれた火が、池をぼんやりと照らしている。首飾りの真中の石のような満月が、波紋たつ水面にぼんやりと浮かんでいた。

中島のすすきは風に揺れ、そこに目当ての者の姿を見つけると、康行は喉もかれんばかりの大声で叫んだ。

「待て！」

白絹の衣をまとった父がいる。宴の装いと思ってみても、現実ばなれして不吉な感じがする。真向かうのは、たしかに紫乃だ。

「来たのか」

紫乃はかたい表情のまま言った。夢の中にいるように、ただ立ち尽くしている父を、康行は焦りと共にみつめた。

「紫乃、聞け。父上は卑劣な真似などなさない。誤解だ」

父はどういうわけか、弁明をする気もないようだった。

「母さまの文箱の中に、あの歌をみつけた。父さまの蹟とは似ても似つかないものだ。ひとつじゃない。いくつもいくつも、しまってた」

眉をひそめ、青ざめた顔で父はつぶやいた。

「捨てろと言ったのに」

うめくような声だった。

「わたしと輝姫は、南家三条の流れを汲む、いところ同士だ」

すこしの沈黙のあと、父は静かに言い出した。

「あの人はいささか不器用で、とくに蹟を姉の秋山の君に笑われてから、同じように不器用なわたしを相手に練習をはじめた」

秋山の君は、康行の母だ。

「子どもの頃のことだ。泣いて悔しがっていたよ」

「麗蹟と呼ばれた輝姫が？」

初耳だった。

「輝姫は負けず嫌いだった。わたしなど、どんどん置いて行かれてだいぶ悔しい思いをしたものだ。あの人が結婚するまで、文のやりとりは続いた。懐かしいことだ」

紫乃はいらいらと肩を揺らしていた。

「夫の家周はいちずに輝姫を想っていたから、いとことはいえ他の男と文をやりとりしていたというのも、それを大事に持っていたのも気に入らなかったのだろう。だんだんと疎遠になり、任国へ下ってからは便りを送ることもなくなった。彼らが都に戻ることも、噂で知ったほどだ」
康行はのどを鳴らした。黙り込んだ紫乃が気にかかった。

「そして、あの知らせが届いたのだ。……あの人の忘れ形見が、このような境遇にあるとは。悪い夢でも見ているようだ」

「なぜだ」 紫乃はふるえる声で言った。

「月がほしくて殺したのだと言え。輝姫がほしくて、奪おうとしたのだろう。なぜ、そう言わないんだ」

目は血走り、怒りを抑えきれないように頭を振り立てた。紫乃は、体をふるわせながら、叫んだ。

「言え。……言え！」

「紫乃、やめろ」

父をかばい身を割り込ませた康行は、しっかりと鬼手をつかんだ。次の瞬間、激しいねじきられるような痛みが襲ってきた。

紫乃が真っ赤に充血した目をみはった。血がぼたぼたと膝を汚した。康行はこみ上げてくるものを飲み下しながら、紫乃をみつめた。

「もういいだろう」

康行は手を伸ばし、紫乃の頬をなでた。

「かたきはもういない。どこにもいないんだ」

泣き濡れたしろい頬に指で触れると、血のあとがのこった。肩を引き寄せ、ひたいとひたいをあわせた康行は、かすれ声で言った。

「鬼手を捨てろ。望んで得られたなら、手放すこともできるはずだ」

「できない」

紫乃は何度も首を横に振った。涙が鼻筋をすべりおりていく。

「もう、わたしとこれは一つのものなんだ」

「鬼と心中したいと言ったら、怒るぞ」

見合ったとき、紫乃はさすがのように康行をみつめた。それで十分だった。腹に食い込む鬼手をがっちりつつかんだまま、康行は腰刀を抜き、鬼手に突き立てた。

「父上、紫乃を」

後ろから紫乃を羽交い締めにした父は、うなずいてみせた。ありったけの力を込めて、康行は鬼手を切り落とした。悲鳴を上げた身をそらせた紫乃は、ぐったりとして気を失ったかに見えた。

「おい、鬼よ」

鬼手を刀で地に縫い止めると、康行はひざをつきながら切れ切れに言った。

「紫乃の片腕と、おれの命をやろう。だから、もう去れ」

紫乃はもう十分苦しんだ。その苦しみで足りないと言うのなら、ここからは康行が引き受けて

やるしかない。

「はやくしろ、鬼。選り好みなどするなよ。さっさとつれていけ」

息をすることすらも苦しかった。康行は念を押すように沈黙した鬼手をにらみつけ、それから気を失ったままの紫乃の顔をじっと見つめ、その場にゆっくりと倒れ伏したのだった。

なんだ、死ぬのか。つまらぬ、つまらぬ

恨みはどこへいった。つまらぬ

「うるさい。もう誰も死なせはせぬ」

うごめく鬼手に、札がはりついた。治長は紫乃を抱き留めながら、冷たく睨みおろした。

「片腕を見逃してやった恩を、もう忘れたか」

中島から、炎が吹き上がったかに見えた。組み上げられた太い焚木は山をなし、満月にも届きそうだ。風音に混じり、読経が響いてくる。

「月見の宴に、きさまは招いておらん。これは、亡き人のための霊鎮めだ。わたしは息子のように甘くはないぞ、朱甜」

真名を知るとは、源の子孫か

ああ、よせ、よせ。鬼門が開くではないか

「黙れ。そのつもりだ、間抜けめ」

つまらぬ、つまらぬ……

鬼は苦しげにうめいたあと、闇よりも黒い影のようになって、消えてしまった。

ぐっとくる単語×三行

たかさわ りえ

高鳴る鼓動わきたつ血潮
しろい肌えににじむのは
甘い花蜜か虹まだらの芙蓉か
「白粉彫り」

暗闇にともるひとつ星は 爛れ落ちる鬼灯のいろ
とじた瞼からにじむ涙 藍の布を染める
かたい指先がつぎにふれるのはどこ
「目隠し」

聖域に一度足先ひたせば
俗世のいっさい脱ぎ捨てて きよげな瞳をただ伏せて
恋心だけはそのままに
「巫女」

まっすぐにゆけと言われた
だから そむきたくなる
なにが悪い ただあなたが恋しいだけなのに
「背徳」

広い野を区切れるの 線を引くだけで

心はかんたんに境界を飛び越えていく
どうか あなたに触れさせてください
「禁断」

箱にいれておいた 鍵はかけずに
あなたにみつめて欲しかった
目と目を見交わして 忍んで笑い合いたかったんです
「秘密」

わたしの望む言葉だけください うつくしい言葉だけ
罵詈雑言で汚れきったこの心を
あなたの無邪気な声ですすいでください
「耳」

ぐっとくる単語 アンケート結果

ぐっとくる単語 アンケート結果

ご協力ありがとうございました！

白粉彫り(体温が上がると浮かび上がってくる空想上の彫り物)

いろんな作品でよく出てきますが、例外なく萌え上がります。

目隠し 巫女 背徳 禁断 秘密 耳 振動

絶望

嫉妬

背中、視線、古、ささやき、記憶、幻、鎖、夢、スーツ、指、紅、執着、邂逅、花びら、泡沫、
牙、衝動、肌、花火、夜

手、夜、闇、衝動、トラウマ、飢え、乾き、希望、歪み、嫉妬、におい、ギャップ、くちびる、
傷、寒い、声、のど、舌、指、背中

うなじ

守人 掌 檻 鏡 写し鏡 無限 永遠 差異